

## テストを疑ってみませんか？

—Language Testing、そして時々 ESP—

清水 裕子

### はじめに

最終講義に代えて、英語学習者そして教員・研究者としての自分のあゆみを振り返りながら、応用言語学関連以外の領域の方々にも、本稿を楽しんでいただければ幸いです。タイトルの「テストを疑ってみませんか？」は、大学院の言語テスト関係の講義で項目分析 (Item Analysis) について触れる際に用いるワークシートのタイトルである。しかし、私の〈テストへの疑い〉は、半世紀も前にさかのぼることになる。そこで、今までに感じたいくつかの〈衝撃〉と共に、話を進めていきたい。

### 1. 「!」「?」多かりし私の英語学習史

#### 衝撃その1

中学生になり、私服が制服に、給食がお弁当生活に、算数が数学になり、そして英語学習もスタートした。教科書 (開隆堂『New Prince Reader』) の最初のレッスンは、“This is a pen.” だったと記憶する。実際の英語でのやりとりでこの表現を使う機会はあまりないが、とにかく楽しく英語を学んでいた。正確な表現は定かでないが、ある日「ゴマ横丁がやってくる」というような内容の新聞記事に目をひかれた。1971年の夏休み、「ゴマ横丁」は「セサミストリート」となってテレビに登場したのである。当時の中学生にとっては生の英語に触れる貴重な機会であった。この番組の米国社会における意義については、後に大学で視聴覚教育の講義を通じて知ることになる。最近では、セサミストリートがUSJのキャラクターとしての印象が先行しているようなら少々残念である。

話を中学時代に戻す。学校で英語を勉強しているのだから、わかるはずだ (!) と楽しみにしてセサミストリートの初回の番組を見た時のショックは大きかった (衝撃その1)。理解できたのは、One, Two, Three… と数字を読み上げるところだけである。こんなはずではなかった (!) と思いながらも、学校の授業を中心に英語学習を進めていった。その後、中学3年生の時に、初めて京都丸善の洋書コーナーに行き、教科書に出てきた『Daddy-Long-Legs』のペーパーバックを購入。教科書とは違う本当の (?) 英語を、読んでくわかる〉と実感したのはこの時が初めてであった。

#### 衝撃その2

当時の京都市の公立高校は9教科入試で、社会と国語を特に苦手とした私には、それを補ってくれる科目が複数あったため、なんとか高校生となった。英語については、この頃から (教科としての) 英語嫌いの道がスタートしたようだ。例えば、1回の授業で進むのはわずか数段落。文法訳読法 (Grammar-Translation Method) で英文解読のような作業が続き、定期試験の時には日本語訳を覚えていけばある程度は点数が取れることもあった。そんな中、またもや丸善の洋書コーナーで出会ってしまったのが米国の雑誌『Seventeen』。さらに、その頃手にしたのがカタログ通信販売で有名だった米国Searsのカatalog。これらが私の英語のテキストとなり、生の英語や異文化との出会いの中で、〈使える英語〉の必要性 (例: 商品の問い合わせ) を実感するようになっていった。

教科書以外の英語で、高校1年生の時に目にしなければよかったのが大学入試問題である。クラスメイトの一人が持ってきていたある大学の入試問題集の問題を目にした時にショックを受ける (衝撃その2)。英訳問題ばかりで、中学3年間の英語を終えただけでは、当然ながら単語も構文も難解。何を伝えたい英文なのか理解できないし、どのように採点されるのかも不可解。ここで通常ならば学習へのモチベーションにつながるころを、私の場合は、こ

の問題で本当に英語力がわかるのだろうか、テストへの疑いの気持ちが芽生え始める。さらに「これは無理だ！」と諦めの早さも発揮し始めたのであった。その結果は高校卒業後に一年間の予備校通い。そこで授業を担当されていた講師（おそらく当時大学院生）が、立命館の採用面接時の先生だったことに気が付いたのは、採用されてから1年後であった。とにかく、＜私のテキスト＞型入試を実施していそうな大学を探し、なんとか受験に備える。また、特に何を勉強したいという専攻や専門性への強い意識もなく、柔軟にいろいろなことが勉強できる大学へと進むことになった。

### 衝撃その3

ところが、なんとか大学生になったものの、そこでの英語プログラムでのショックを受けることになる（衝撃その3）。いわゆる English for Academic Purposes を軸としたカリキュラム設計で、当時としては、おそらく終盤の時期にあったかもしれない Audio-lingual Method も取り入れており、まさか自分が英語教員になるとは予想もしていなかったものの、このプログラムを学習者として経験したことが、後にカリキュラム設計を考える際の参考になっているのは確かである。なお、大学での英語の成績は散々で、私の汚点として成績証明書に残っている。

英語で開講される科目も多い大学のため、日本語開講の科目を選ぶようにして履修計画を立てていったが、専門科目のひとつで「測定と評価」という科目を履修した際、課題として与えられた文献を通じて池田央先生（立教大学名誉教授）の『テストで能力がわかるか』（日本経済新聞社、1978）に出会い、テストへの疑いが当然起こることや、日本のテスト風土について学ぶことになる。本科目を担当された栗山容子先生は、受講者をうまく導きながら、様々な課題を通して測定と評価の諸側面を指導してくださった。しかし、具体的な「教科」がないと現実味がないと感じていた私には、（就職で）困った時のために履修した教職課程での先生との出会いが、今の自分へとつながって行ったのである。

### 大学卒業後の道は、、、

当時は、大学卒業時の年齢が通常の学生より高いことや、女子学生であること、さらに自宅生ではないことなどから（あるいは、ここでも諦めの早さを発揮し）企業への就職は難しいと察知し、周りの友人も履修していることから教職課程を履修。私の専攻した学科では社会科か英語科の教員免許を取得できたが、社会科は幼い頃からの苦手科目であったため、消去法で英語教員の免許を取得することになった。しかし、苦手意識が強くなっていた英語である。言語学や英語学、さらに英米文学なども履修する必要があるが、前途多難となった。特に、言語学については、英語のテキスト、英語での授業のため、専門用語と悪戦苦闘した思い出が残る。英語教授法については、当時、Graded Direct Method を推奨されていた升川潔先生から教えを受け、その授業の中で言われた「これから勉強するなら Testing ですよ。」「Cloze Test が注目されています。」ということばを頼りに、大学院への進学を考え始めることになっていく。

### 饅頭こわいと Cloze Test

古典落語の演目ではないが、Cloze Test にまつわるエピソードを紹介しておく。大学一年生の終わり頃だったか、ある先生がご自分の研究のために実験協力者を募られ、お礼にお饅頭がでるということで参加した。そこで受けたのが、当時、米国の英語教育の研究者を中心に脚光を浴びていた（と言う）Cloze Test であった。Cloze Test とは、あるまとまりのある文章の最初の文はそのままにし、次の文から n 語毎に単語を削除した英文を受験者に提示し、受験者が元の単語を埋める形式のテストである。もともとは英文の readability を測定する目的で Taylor (1953) により開発されたが、英語教育においては、総合的な英語力の測定の指標となるだろうということで、1980 年前後から多くの研究が行われてきた。お饅頭につられて参加した自分を攻めたくなるほどストレスの大きいテストであったが、後にこの研究を目指して大学院に進学するなど、大学一年生の私には知る由もなかった。

様々な要因を考え、大学院に進学する方向を検討し始めたものの、当時は第二外国語の試験があり、また学部では原喜美先生（国際基督教大学 / 沖縄キリスト教短期大学名誉教授、社会学）のもとで学び、その時の専門とは異なる



道を選ぶことになるため、独立研究科のような形態の米国の大学院に進学することになった。Cloze Test では、当時、New Mexico 大学の John Oller 先生が研究を進められていることを知っていたが、一人の先生のみを頼りに留学するのは危険であり、また Certificate を取得できる機関がいいという助言を受け、Cloze Test の研究もされている Frances Hinofotis（現在、Butler）先生も在籍されるカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に進むことになった。

## 2. 大学院時代

### 衝撃その 4

日本での英語教育しか経験のない者にとって、ESL（English as a Second Language）と EFL（English as a Foreign Language）のギャップは大きかった（衝撃その 4）。ある日、テストを返却してもらったベトナム系の ESL 生が、彼が書いた答え（\*Ibeen studying Englisho for...）は「周りのみんなが使っている！」から正しいのだと先生に抗議しているのである。確かに have の音が会話の中でははっきりと聞こえないが、文法を学んでいる日本人にとっては予想もしない質問であり、それ以上に、英語で抗議できることに驚いた。とにかく、大学院では、講義を聴いてノートを取り、なんとか質問をして自分の存在をアピールしながらの日々で、英語力以上に度胸がついてきていた。念願の Butler 先生の授業を履修し、最終試験（エッセイ・テスト）の際には、英語母語話者でないので不利になると伝えて辞書を使用させてもらい、さらには質問内容が ESL 中心であり、EFL しか経験のない者には解答しにくかったと、試験後に伝えに、いや文句を言いに行った記憶がある。修士一年目から二年目に移る際に選考があり、ここで落ちたら元も子もないと、なんとか GPA を高く保つ必要があった私の生き残りのためのストラテジーであったことは間違いない。Butler 先生がそのことを覚えておられるかどうかかわからないが、今も親しくさせてもらっている。

### 大学院時代の指導経験（衝撃その 5）と救いの声

UCLA の Certificate Program では教育実習が必須で、とにかく私自身の英語力に問題があるので、大学の ESL ではなく、初級レベルのプログラムでの指導を希望したところ、ロサンゼルスダウンタウンにある Evans Adult School で実習させてもらうことになった。私が配置されたクラスは、半分は中国人の年配の方、残りはメキシコからの移民の方たちで、前者は同じ中国人の仲間とおしゃべりをしに来ている感が強く、後者はこの国で生活していく手段を求めるために英語を学ぶ方が多かったように記憶する（衝撃その 5.1）。ここで ESL での指導を体験できたことは貴重であった。ただ、Certificate を取得し、修士二年目に突入できるということは、学費等がさらにかさむということにつながっていく。その時、天からの救いの電話が入った。当時、鹿児島大学から見えていた高島英幸先生（東京外国語大学名誉教授）から、UCLA の日本語プログラム（中級）で TA をしないかという話をいただき、二つ返事でお引き受けした。学部時代に小出詞子先生の日本語教授法などのクラスをつまみ食いの履修したことが役立つことになった。当時は、赤塚紀子先生が UCLA の初級プログラムで活躍を始められた時期でもあり、言語プログラムの設計の観点からも学びの機会を与えていただいた。また、TA にも関わらず研究室を使わせていただき、主に日系アメリカ人の学生を中心に、オフィスアワーで様々な議論を交わすことができた。日本語の履修者の多くは日系三世の方たちで、少しは日本語を使えるものの、父親の日本語の影響からか「腹が減ったので、茶漬けを食いました。」と笑顔で答える女子学生に驚かされた。また会話では日本語母語話者と思える学生が、漢字クイズで「重要」を「十用」と書き、落ち着いた顔で“I don't care.”と。それには言葉を失った（衝撃その 5.2）。

ところで、研究ではデータ収集に時間がかかったことで、修士号の取得に予定よりも多くの時間を費やしてしまった。日本でデータを収集できたのは、当時、岡山大学から在外研究でお見えになっていた松畑照一先生のお陰である。何とかして Cloze Test に関する論文を提出し、1981 年 3 月末で学生生活を終えることになった。Butler 先生からは、日本に戻ったらこの人に連絡をなさいと、筑波大学の友賢二先生（筑波大学名誉教授）の名前を受け取り、帰国の途についた。日本における言語テスト研究の第一人者であった。



### 3. やはり「!」「?」多かりし英語教員生活

#### 衝撃その6

帰国の数日後から中高教員としての生活がスタートしたが、中学生への Graded Direct Method での指導やフォニックスの試みなど、やってみたいことはたくさんあった。しかし、忙しい毎日で気が付けば一学期が終わろうとしていた。着任した学校では、丁度、その年から米国ヴァーモント州にある St. Michael's College (SMC) での夏季短期留学プログラムがスタートし、その引率教員の一人として高校生たちと共に出かけることになった。ここで、また衝撃がやってくる。それは、SMC の教材室にあった Jamestown 社のカタログと教材の数々である。私が学んだ大学院はリサーチ中心だったが、SMC の大学院の英語教育プログラムは教育現場に直結するプログラムであることに驚いた(衝撃その6)。同行した上司がいくつかの教材に興味をもち、帰国後、教科書分析を開始し、検定教科書も含めていくつかの候補となる教科書を選定したことを記憶するが、その中には、後に開発に携わることになった増進堂の検定教科書が含まれていたことには何か運命を感じる。

#### 衝撃その7

教育現場に携われるようになったことには感謝しつつも、最新の研究や文献へのアクセスの方法はなく、どんどん研究から遠ざかってしまっていることへのあせりは日ごとに高まっていった(衝撃その7)。英語教育の領域での「先輩」や「恩師」が日本にはいないし、今のようなインターネットもなく、研究会や学会の情報も入ってこない。そんな中、英検研究助成金制度の第一回の募集を知り、一か八かで研究計画書を提出。下火となっていた Cloze Test を用いた研究である。ありがたいことに助成対象の研究の一つに選ばれ、池田央先生と大友賢二先生からもアドバイスをいただける機会に恵まれた。また私にとっての初めてのコンピュータ・Macintosh Plus と統計ソフトの Stat View を手にすることになった。

#### 衝撃その8と学会活動

中高教員生活はわずか5年で終わり、大学での英語教員生活をスタートすることになったのが1989年(平成元年)である。滋賀大学経済短期大学部での4年間、そして近畿大学教養部での5年間では様々な驚きがあった(衝撃その8)。まず「英語プログラム」としてではなく、ひとつひとつの授業が単体としてあることに慣れる必要があった。授業時間は、学生時代は60分や70分であったため、90分授業というのも未知の経験であった。また、職員室で仲間の教員がいた環境から個人研究室での生活となり、特に滋賀大学では、女性教員は私以外に1名で、英語教育を専門とするのは私のみという環境。この孤独な状態から抜け出るためには、外の世界(学会や研究会)に出ていく必要があった。そんな中、またもや天の声が聞こえてきた。再び高島英幸先生の登場である。大阪を中心に「英語授業研究会」という新しくできる学会を紹介して下さったのである。当時近畿大学教授で、当学会の初代会長である樋口忠彦先生には、その後、学会での活動や発表だけではなく、英語教育関係の雑誌での記事の執筆など多くの機会を与えていただいた。

大学の英語教育に携わる者としては、大学英語教育学会関西支部の研究会を通じて読解用の教材を開発したり、杉森幹彦先生(立命館大学名誉教授)をリーダーとするグループでテスト開発を経験することができたことは貴重である。また、後者をきっかけに、その後の研究活動を共にする木村真治先生(元・関西学院大学教授)に出会うことができた。教材開発では、SMC で出会った Jamestown 社の数多くの読解教材をもとに木村先生と共に編集した『Independent Reader』(1998)をマクミランランゲージハウスより出版することができたが、斉藤智氏(現在、桐原書店)の情熱とお力添えに感謝している。読解ストラテジーを意識した教材は、その後、多く出版されるようになったが、これらが学習者の読解態度に良い影響を与えることができているれば幸いである。また、同じコンセプトで、英文読解プロセス研究でも有名な卯城祐司先生(筑波大学教授)と共に McGraw-Hill Education より『Reading Activator』シリーズを出版できたことは、宍戸一氏(現在、ケンブリッジ大学出版)の読解教育への理解に負うところと感謝している。

#### 4. 研究分野について、ほんの少し

##### Cloze Test への未練、そして決別（?）

ここから研究の話に入って行くことにする。Cloze Test への興味は、testing tool というよりは learning tool として、つまり、学習課題としてクローズ文を継続して用いることによって、望ましい読解態度を形成させ、読解力の向上を図れるのではないかという思いが根本にあった。そこに Patricia L. Carrell 先生の Reading Strategy Inventory が登場し、1990 年前後よりリーディング指導における速読学習の効果の検証を中心に研究を進めて行った。また読解ストラテジーの研究を教育現場に活かす方法のひとつとして、先に述べたような読解教材の開発へと繋がっていったわけである。Cloze Test に関しては、妥当性の研究の観点から、木村真治先生および小山由紀江先生（名古屋工業大学名誉教授）と共に各種リーディングテストの表面的妥当性と波及効果の研究を行ったが、Cloze Test を含めて、Authentic なテキストに空所を設けるなどの、ある意味不自然に加工したテキスト形式のテストに対しては、学習者や受験者から見て表面的妥当性が低くなる結果が出てしまった（衝撃その 9）。この結果を受けて、しばし Cloze Test とは距離を置くこととなり、もっぱら大学院の言語テストの授業等で本テストを紹介するのみに留まることになる。

##### English for Specific Purposes

ESP (English for Specific Purposes) が 2000 年頃から日本でも注目されはじめ、学習者が、近い将来に属する集団 (Discourse Community) におけるニーズ分析をもとにカリキュラムを設計するアプローチをとるプログラムが出てきていた。1998 年から 2000 年には、工学系単科大学の卒業生を対象に職場における英語のニーズ調査等に関わったが、実際によく使う英語力（読解と作文）と自分に欠けていると感じている力（聴解と会話）にギャップがあることや、ESP を念頭においたカリキュラムの改善を必要としていることが明らかになった。

同様の調査を、立命館大学経済学部でも実施し、大学英語教育学会関西支部の ESP 研究会および深山晶子先生（大阪工業大学名誉教授）や松原豊彦先生（立命館大学名誉教授）の協力のもと、卒業生を対象に質問紙調査を実施し、職場における英語のニーズを把握した。また経済系の専門教員を対象に、学部生に期待する英語力のニーズ調査や経済学系の他の機関の英語カリキュラムに関する聴き取り調査等により、現在の状況と動向を把握した。ESP アプローチのもとでの教材開発も試み、その教材を用いて授業を展開し、学習効果の検証や出口テストとして外部テストを用いて英語力の測定も行ったが、リメディアル教育を必要とする学習者が一部存在することが観察され、ESP 教材の適合レベルの問題が生じてきた。このように、ひとつの教育機関においても、多様な英語力を持つ学習者が存在し、異なる英語力を備えた学習者の自律性を養う方途の研究の必要性を認識するに至った。

卒業生を対象とした質問紙調査の結果については、大学時代を振り返る質問項目への回答を在学生へのメッセージとして捉え、立命館大学経済学部が独自に実施している面接トレーニングイベント「メントレ」において、話をする機会を与えてもらったことは、研究成果の活用として意義があった。

##### Language Testing/Assessment

約 20 年前に、全国の大学の英語教育におけるプレイズメントテスト（配置テスト）の実施に関する調査を行ったが、その当時、なんらかの統一的なテストを実施している大学や実施計画を持つ機関が多いという結果が出た。すでに独自に開発したテストを用いている機関や、独自開発の必要性を感じている機関もあり、配置テストやテスト開発そのものへの関心が高く、またカリキュラムや学習者に応じた測定道具の必要性や重要性を示唆する意見が示された。しかし、その一方で、テスト開発や結果処理および分析・解釈に関する具体的な手法や理論面での基盤が各機関に備わっていないという問題もあげられた。

言語テストの分野は (1) 外国語としてのある言語の能力を測定するためには、どのようなテストを課せばよいかという、問題内容や形式を検討する領域と、(2) テスト結果の統計処理や、課したテストは信頼性が高いか、難易度は適切か、テスト結果からどのような判断が可能かなどを検討する領域からなる。学部時代、つまりさらにさかのぼ

ること20年。升川潔先生が英語教授法の授業の中で、注目されている領域として Testing を挙げられ、さらにその授業の中で Randy Thrasher 先生（沖縄キリスト教学院大学・国際基督教大学名誉教授）から本領域の講義を何回か受けた者にとっては当然のことも、日本の教育現場ではまだまだ浸透していないことを実感したのであった。

### テストを疑ってみませんか？

立命館大学着任当時は、英語のプレイスメントテストとして用いるテストが学部毎に異なっていたようだが、全学で使用するテストを開発するように依頼され、＜開発—パイロットテストの実施—分析—改定＞のプロセスを辿ったことを懐かしく思い出す。当時、問題と感じたのは、いわゆる Test Specification がなかったことで、確か TOEFL の問題集を受け取り、そこからテスト項目を抽出するように指示されたことを記憶する。しかし、テスト開発では、対象となる学習者をもとに、測定したい構成概念を明確にする必要があり、結局、担当教員で項目の作成を行うことからスタートした。

開発の詳細はともかく、ここで少し項目分析の重要性について触れておきたい。テスト開発で出来上がったテストは、パイロットテストを実施し、項目の分析を行わない限り、教師や開発者の＜カン＞だけで良し悪しを判断するのは難しい。例えば、次の項目である。40問程度からなら文法テストの中の一項目である。まずは、答えを考えてみていただきたい。

例 Did you know that this story was based ( ) part on a real story?  
 (A) by (B) on (C) at (D) in

パイロットテストの受験者の解答を項目分析にかけたところ、次表のような（予期せぬ）結果を得た。正解は D である。しかし、D を選んだのはわずかに 13%。74%の受験者が B を選択している。B を選んでしまう理由は納得できるが、本来そのテストセットで上位レベルに分類できる集団（慣習的に上位 27%）の内わずか 8%しか正解を選んでおらず、本来は下位レベル（慣習的に下位 27%）に属する集団のほうが、正答率が高くなっている（19%）。その結果、上位・下位の弁別力（Item Discrimination）がマイナスになってしまっている（-.11）。このような項目が含まれていると、テストセット全体の結果の信頼性に影響を与えてしまう。良問だと思いながら作成したものの、実施し分析してみるととんでもない結果となり、結局、この項目は日の目を見ずに終わった。

アイテムに関する統計		各選択肢の選択率			
項目難易度	項目弁別力	選択肢	全体	下位 27%	上位 27%
.13	-.11	A	.06	.14	.01
		B	.74	.51	.86
		C	.08	.15	.05
		<b>D*</b>	<b>.13</b>	<b>.19</b>	<b>.08</b>

このように、テスト開発には必ず分析が必要となるわけだが、ただし、テスト理論を勉強していくと、様々な面白い事実、言い換えれば、様々な壁に出くわすことになる。

### 古典的テスト理論の壁と新しいテスト理論

前述の項目分析は、古典的テスト理論に則ったもので、正答数に基づいた素点を用いており、平均点や偏差値などと同じように、必ず受験グループの特性、つまり受験した集団のレベルの影響がでてしまうのが特徴であり、そして問題点でもある。異なる集団が受験すれば、項目難易度や項目弁別力も異なり、同じ項目でも異なった難易度等を持つかのように見えてしまう。そのため、項目分析はサンプル数を多くして実施することが推奨されるわけである。テストは結果（テストの点数）をもとに受験者を連続尺度上に並べて何かの決定を行うことが多いが、得点を構成して



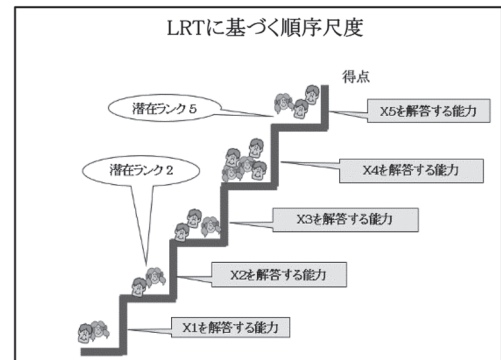
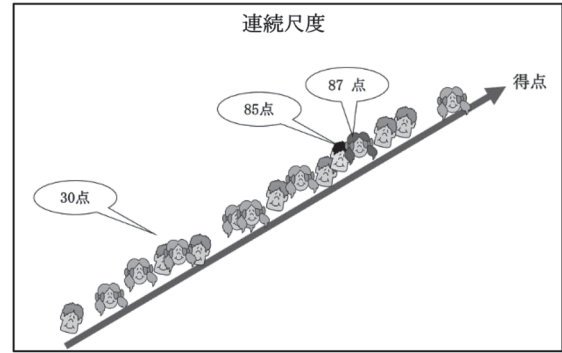
いる各項目の信頼性が確保されていないと、例えば cutoff score を設定しても、実はその周辺で逆転現象が生じている可能性がある。合否などの人生に関わるような決定を行うハイステイクス・テストとなれば、事は重大である。

この古典的テスト理論の問題を解決する糸口が「項目応答理論（IRT: Item Response Theory）」にある。私自身 IRT を知ったのは 1990 年代で、当時は、日本の英語テスト環境では IRT の必要性は低いのではと言う研究者もいた。しかし、何年前かに、大学入試改革の議論を扱う新聞記事で IRT に触れられていたことから、比較的身近になってきたと言え

よう。IRT では、事前にサンプルテストを実施して、項目の識別度や難易度、さらに当て推量度などのパラメータを項目に付与し、確率論および対数関数によるロジック得点を用いる。それにより受験者やテスト項目に依存しない能力推定が可能になり、不変的に受験者の能力値とテスト項目の難易度を求めることができるのである。コンピュータ適応型テスト（CAT）などに活用されている理論でもある。

ところで、1 点の差で合否が分かれるなどの話をよく耳にする。しかし、わずかの差が＜真の差＞であるかどうかを判定するのは不可能であろう。No test is perfect. 測定標準誤差を含む様々な要因が、テスト得点と真の得点をイコールでつなげることを阻んでいる。連続尺度上で隣り合ったテスト得点が、実は、誤差や配点の影響で上下関係ができてしまっているだけで、実際には＜同じ段階＞に属している可能性が高いかもしれない。そこで登場してきたのが、潜在ランク理論（LRT: Latent Rank Theory）である。連続尺度ではなく、順序尺度上に受験者を並べ、潜在ランクという段階上に受験者全体をいくつかの下位グループにまとめて配置するのである。

LRT の統計手法の開発に関わられた庄島宏二郎先生（大学入試センター准教授）は、2003 年に IRT に関する彼の論文を目にして以来、私が尊敬する研究者の一人となったのだが、その後、共に研究する機会を得て、言語テストの領域の分析等に関わっていただいた。その一連の研究は、第二言語習得論（SLA: Second Language Acquisition）を専門とされる杉野直樹先生（立命館大学教授）、山川健一先生（安田女子大学教授）、大場浩正先生（上越教育大学教授）、中野美知子先生（早稲田大学名誉教授）と言語テストを専門とする木村真治先生の研究グループによって行われ、その仲間に入れていただいたことは研究者として身に余る光栄である。その研究期間の初期の段階で、私は立命館大学から在外研究の機会を得て、University of British Columbia の Dr. Bruno Zumbo のもとで指導を受けながら、研究グループのひとつの課題であった Differential Item Functioning（DIF）（差異項目機能）の勉強も進めたが、当初の目的であった異なる母語話者間での DIF 分析のデータ収集に至らなかったことは残念であった。しかし、SLA 研究者と共に研究できたことは、大学院に進学した時から私自身が抱えていた問題をさらに明確にすることになった。つまり、英語学や言語学の基盤がないことから、得られたデータについて、言語習得の観点からの深い分析の議論の中に入り切れないことであった。研究者としては、ある意味、致命的であることを再認識した。



## 5. 結びにかえて

### 「深さが幅を作る」

升川潔先生が英語教授法の授業の中で言われたもうひとつのことばを思い出してみる。学部時代は、自分の専攻に関係なく、あれこれつまみ食いの勉強し、根無し草の状態大学院進学を決めた時に、「深さが幅を作る」という

升川先生のことばに出会った。自分の選択はこれでいいのかと悩んでいる時に、何かを深く研究していくと研究の幅も出てくるから心配するなど、私のために投げかけて下さったことばだと勝手に解釈し、それを支えに渡米した。残念ながら、私が大学院生の間に升川先生は急逝され、英語教員になったこともお伝えできずに終わった。言語テストへのきっかけを作っていただいたにも関わらず、研究の深みにはまることなく、また研究領域の幅を出すこともできずにここまで来たことは、すべて私自身の怠慢によるものであり、天国に向かってご報告すべきことと感じている。

### 永遠のテーマ

Cloze Test から離れたとは言え、言語テスト研究への興味は続き、日本言語テスト学会（1996年12月設立）の設立メンバーとして大友賢二先生から、また日本テスト学会（2003年5月設立）の設立発起人として池田央先生からお声をかけていただいたことは名誉なことと感じている。これらの学会の学会発表や学会誌を通じて、多くのすぐれた研究に出会う度に、私の中の永遠のテーマが思い浮かぶ。それは、Visualizing Invisible と Dividing Indivisible である。言語能力を点数やグラフで表すことで可視化した場合、ある意味、学習者にとって診断的な情報をわかりやすく提供することにつながり、役立つ情報となるわけだが、では言語能力とは何かという話につながってくる。最近、大学入試における4技能試験の話題（あるいは問題）があちこちで行き交ったが、そもそも言語能力を下位能力に分割できるのであろうか。自分の母語を考えてみた場合、そんなにきれいに分けることはできないことに気づくのは私だけであらうか。ここで言語能力観を問いなおすことになる。

能力の要素を分けて、それぞれを個別に測定するという discrete point tests に対して、より統合された能力を測定するという integrative tests が注目され、そのひとつとして Cloze Test が研究されたが、どうやら話が振り出しに戻りそうなので、永遠のテーマはパンドラの箱に閉じ込めておいたままのほうがいいのかもかもしれない。とにかく言語テスト関係の領域は多岐に渡っている。言語政策やテスト政策も含めると、非常に範囲が広く、一人の研究者がすべてをカバーすることは困難である。そこで応用言語学や英語教育学はもちろん心理測定学や統計学の研究者間での分業と協業が円滑に行われ、より面白く、かつ教育現場に役立つ研究が進むことを願っている。

私自身が Language Testing にどれだけ貢献できたかという点、全く恥ずかしい限りである。ただ、言語テストや測定と評価の領域を教育現場に携わる方々に広めていくという点では、わずかながらの貢献ができたかと思う。それと同時に、その指導の場を与えてくださった立命館大学言語教育情報研究科はもちろんのこと、関西学院大学言語コミュニケーション文化研究科や同志社女子大学文学研究科にも感謝する。

### 感謝の意を込めて

多くの教育現場でプロジェクト型学習（PBL）が注目されて久しい。英語教育を考えた場合、規模が大きく、多くの教員が関わり、また多様な英語レベルの学習者が存在する教育現場では、学習者のレベルを考慮しながら言語使用を促進するためのカリキュラムを整える必要がある。つまり、プログラム型カリキュラムを中心として、その中に、必要に応じて PBL の要素を取り込むことになろう。この点で、立命館大学経済学部でのカリキュラム改革や 2018 年度にスタートした食マネジメント学部の英語のカリキュラム設計に関わられたことは非常にやりがいがあった。その際に、事務長を始めとする学部事務室や言語教育企画課の職員の皆さんの協力があつたことを忘れてはならない。

私自身が特に英語が得意であったわけでもなく、教えることが好きであったわけでもないのに、この職業を続けられたのは、どうやら人と接することに興味があったからであらう。2019 年度からコロナ禍による対面授業の制限で、四角いモニターの中に映し出される四角いボックスの中の受講者名を前に授業をしながら、その思いを新たにした。今後、教育現場における DX 化というものがあるような方向性を持ち、我々の英語プログラムにどのような影響を与えるのかは、好奇の念をもつよりも、案じることのほうが多い。近い将来、どのような＜衝撃＞が展開していくのであろうか。

気が付けば、英語を教え始めて 40 年近く経った。その教員生活の中で、英語教育の領域での先輩や恩師がいないと嘆いていた時代を忘れてしまうくらい、多くの人々に出会うことができたことは私にとっての財産である。話の中では触れなかったが、研究者そして教育者として常に尊敬しているのが平野絹枝先生（上越教育大学名誉教授）であ





る。言語テストと教育現場を〈フレンドリー〉に結ぶ機会を与えてくださった中村洋一先生（清泉女学院短期大学教授）や白戸治久氏（英語運用能力評価協会）はもちろんのこと、我が国の言語テスト研究の第一人者と言っても過言ではない根岸雅史先生（東京外国語大学教授）や渡部良典先生（上智大学教授）とも親しく接していただいていることに感謝する。また、小田切純子先生、加賀田哲也先生、多田昌夫先生、野口ジュディー先生、Jane Matsumoto 氏、Elizabeth Hartung-Cole 氏、瀬川仁子氏、露木隆二氏、Alex Pang 氏からの変わらぬ友情にも心から感謝する。

最後になったが、私が教員でいられたのは、出身校である京都市立日吉ヶ丘高校での教育実習や大学院時代の日本語の TA に始まり、中学・高等学校、夜間開講も含む大学での英語授業、そして大学院での言語テスト関連の科目で出会った多くの学生諸君が私に教育現場を与えてくれたからである。心から〈ありがとう〉を伝えながら、1986年にチャレンジャー号の事故で亡くなった宇宙飛行士で高校教師でもあった Christa McAuliffe 氏のことばで本稿を閉じることにする。

I touch the future. I teach.

